

元田永孚の思想形成

―近世後期肥後藩における教育の中で―

はじめに

明治天皇の側近、元田永孚（一八一八―一八九一）に焦点をあてて、近代日本の天皇制と儒学思想との関係を明らかにするうえで、元田が思想形成をした社会の教育・学問の状況を明らかにする必要がある。元田永孚の青年期における知的環境―師匠や学友など―はどのようなものであったのか、元田永孚の思想形成にそれはどのような役割を果たしたかを分析する必要がある。

文政元年生まれの元田永孚は、明治天皇の侍講の職に就いた明治四年の時点で、既に五四歳になっていた。そのため、元田永孚の思想の形成とその成熟は、明治維新後ではなく、むしろ近世後期の世界にあつたとも考えられるのであり、明治維新以降の思想的活動や議論なども、こうした近世後期に成熟した思想の一角として考えてみる必要がある。

しかしながら、近世後期における元田永孚の思想形成については未だ十分議論されていないのが現状である。多くの研究は、維新以降の彼の思想的・政治的活躍を主としており、特に彼の明治期教育への貢献、明治期における儒教思想の復活に対する貢献などに関心を集中してきた。しかし、明治天皇の側近となつた時点、五四歳以降を分析するだけで、彼の思想の全体を批評することは、

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：中村春作（主任指導教員）、倉地暁美、大塚 豊、西原大輔

アンディー・バンキット・セティアワン

（受理日二〇〇九年一月六日）

あまりにも不十分ではないだろうか。沼田哲が指摘したように、天保十二年の元田永孚が時習館を退き実学党を形成したことを軸にし、元田永孚と横井小楠（実学党）との関わりで思想を分析する視点も、文政元年から天保十二年にいたる二四年間の空白、そこにおける学問形成が、視野の外に置かれている点で不満が残る。むしろ、二四歳の人間には、ある程度の人格・教養が既に形成されていたと考えることの方が自然であろう。

こうした元田永孚の思想史研究の空白を埋めるために、本稿では元田永孚の青年期（文政元年から実学党の結成、天保十二年まで）における教育状況を分析し、その時期における彼の思想形成を明らかにすることを目的とする。「青年期においてどのような教育を受け、どのような知的体験をしたのか」という、知的環境が形成した彼の思想を中心に検討することとする。

一 熊本肥後藩の教育形態と横井小楠の実学

一―一 熊本肥後藩の教育形態

肥後藩における藩の教育活動は、近世中期に細川重賢（一七二〇―一七八五）が藩主になってから本格的に行われた。それは重賢自身の学問への関心に所以するものであるとともに、肥後藩の財政の危機という政治状況がその背景にあったことが考えられる。重賢は財政再建のために、人材育成に注目した。それは彼が肥後に入国したときに述べた「困窮の内にも文武の心懸け忘却これなき様にいたしたく存じ候事」という発言から窺える。藩主重賢の教育熱心の象

徴としてあげられるのは藩校時習館と再春館の建設である。時習館は宝暦四年に建設され、漢学、国学、習字、習礼、算術、音楽、故実の学問が主な授業として設けられた、また、再春館は宝暦六年に建設され、その教育は医学が中心であった。『新熊本市史』には「再春館の教育目的・理念は長岡内膳による『再春館壁書』や村井見朴による『再春館会約』に見ることができ。すなわち、前者では、医は仁術であること、治療と学業では学業をもつばらにすること、師を尊ぶことを述べ、後者では医学のあり方や良医を六事や四徳と結びつけ、気運・律原・経絡・本草・脈色・方法を六事とし、医才・医学・識量・文章を四徳として良医のあるべき姿を述べている」とある。時習館は肥後藩の人材育成機関とされ、優等であれば庶民身分の人でも藩校時習館、さらに時習館のエリートを養成した寮にまで進学することが可能であった。『新熊本市史』によれば、この伝統が慶應二年にも続いてきたことが分かる。

時習館と再春館のほかにも、現熊本県内にはいくつかの学校、私塾、寺子屋が存在した。宝暦六年に建設された伝習堂や、宝暦一三年に宇土藩に建設された温知館である。寺子屋の状況を見ると、熊本肥後藩における教育への熱意が分かる。寺子屋は宝暦から明治にかけて八四三校が新しく建設され、特に天保や嘉永、安政の年内に新設された寺子屋の数は非常に多く、天保年内（一四四年間）に一九六校、嘉永年内（六年間）に一三四校、そして安政年内（六年間）に二三四校が新しく建設された。これらの寺子屋教育を担ったのは誰であろうか。『新熊本市史』の「寺子屋師匠の身分」の項目を見ると、寺子屋の師匠全体の約五八％は武士、続いて庶民（約三二％）、続いて僧侶（約三％）、残りは農民や神官、医者などであったことがわかる。つまり、知識の育成を担った階層は医者や儒学者などのような専門的知識階層ではなく、むしろ武士と庶民だったのである。

これらの学校・寺子屋の教育に加えて、熊本肥後藩内には私塾も多数あったが、私塾の設立者または校主・校長のほとんどは藩校時習館の関係者―教授あるいは助教―出身者で占められていた。そして、その役割は、藩校時習館の現代語でいえば―予備校と塾の役割であった。いわば、熊本肥後藩の教育世界は藩校時習館の色に染められていたと考えてもよいであろう。

以上説明してきた藩校、私塾と寺子屋のほかにも、手習所や御家人稽古所があったが、ここではより影響力を有した藩校と私塾、そして民衆に幅広く普及した寺子屋のみ取上げた。こうした状況からは、次のことが考えられる。一、

宝暦以降の熊本肥後藩の教育の繁栄は藩の政策―人材育成を目的とした教育―によって起きた。特にこの任務を担ったのが藩校時習館である。二、私塾や寺子屋のような藩校時習館以外の教育機関のほとんどが藩校と深い関わりをもっていた。私塾が時習館の教育の補助的役割を果たす一方、寺子屋出身の庶民も成績が優等であると認められた者は時習館に進学することができた。こうした教育状況の背後には藩の人材登用システムがあった。肥後藩の教育機関の多くは―直接的または間接的に―人材登用システムに繋がっていたのである。三、以上の教育システムを担ったのは、主に武士であった。右の三点の中でも、特に第二点は近世後期肥後藩の教育状況の特徴であった。それは藩校と私塾が一体化されていたことを示す、他藩には見られない状況であった。

一―二 時習館の教育と横井小楠の思想的批判

ここまで近世後期熊本肥後藩の教育環境を述べてきたが、さらにより具体的にみてみよう。

藩校の時習館は宝暦四年（一七五四）に設立されたものである。時習館の設立は当時の藩の経済・政治状況と非常に関わっており、藩の人材の育成が目的とされた。それは以下の『時習館学規』から見て取れる。

維れ宝暦五年乙亥の春、我が公新に学館を興し、扁して時習と言ふ。国の子弟をして業を其の中に肄わ令む。……（中略）……其の耳目をして、異物に触る、も遷らざら使むるは、人倫を教うし英才を育て、而して国の用に供する所以なり。

『新熊本市史』は、肥後藩での学校の建設の動きは宝暦二年以前にも既にあったが、実際の行政的な手続きなどは宝暦二年以降に行われたとしており、具体的には、「宝暦二年（一七五二）、藩主重賢は堀平太左衛門に学寮を申しつけたが、同四年十月に一門の長岡内膳忠秀が学寮の世話をすることになり、同年一二月に学寮を時習館、武芸所を東樹・西樹と称して藩校が完成した」とある。そして時習館が開校されたのは翌年、宝暦五年であった。

時習館が開校される以前にも肥後藩には既に数人の儒者がいた。たとえば、僧侶の日収（一五七九―一六五〇）や北島雪山（一六三六―一六九七）、大家退野（一六七七―一七五〇）、井上雪溪（一六八四―一七三九）、藪慎庵（一六八九―一七四四）、そして後に時習館の初代教授になった秋山玉山（一七〇二―一七六三）などがいたが、時習館の設立時には、既にその多くは亡くなっており、当時、代表的な儒者とされたのは秋山玉山であった。

宝暦四年に設立の時習館教授に任じられた秋山玉山は、どのような教育理念で時習館を指導したのか。玉山が作成し宝暦五年に発布された『時習館学規』を見てみよう。『時習館学規』には、時習館の教育目標や過程などが記されており、その中から、初代教授の秋山玉山の教育方針、あるいは時習館全体の教育方針が窺える。玉山は「異物に触る、も遷らざれ使むるは、人倫を敦うし英才を育て、而して国の用に供する」と、教育の基礎的目的を述べた後、次のように述べる。

今や長幼を斯の館に會し、以て来学の便に従う。其の教は則ち文行忠信、其の書は則ち詩書易春秋三礼、其の事は則ち礼楽射御書数なり。聖は邈なりと雖ども、方策具わり存す。此に由りて之を求めんか、則ち亦以て畔か弗るべきに庶幾からんか。¹⁰⁰

そして、玉山は実施しようとした時習館の教育過程を具体的に、まず、「音義詳明なる者を択び以て子弟の句読を文授せしむ。凡そ子弟の句読を受くるは、赴館の早晚を以て、之が先後と為す。先ず孝経論語を授け、次に五経諸書に及ぶ（後略）……」とする。そして、「経義に疎通せる者を択び、毎月三八の日を以て、尊経堂に講説せしむ。必ず襟を斂めて正座し、従容として教諭し、主として孝弟忠信、師を隆び友に親しむの説を以て須へし（後略）……」と時習館の学習段階を説明する。そして次の段階として、「筆論精熟なる者を択びて、蒙釋に誨うるに把筆法、及び千文急就章等の書を以てす（後略）……」、その上の段階は、「善く容を為むる者を択びて、童幼に訓うるに定省視膳及び洒掃応待。坐立進止等の儀を以てす（後略）……」とする。さらに、玉山は時習館の学風を、「学業は、厳しく課程を立つことを須要とす。孝経論語一科、易書詩一科、春秋三伝一科、周礼二載記一科、是を正業と為す。古義を主とすと雖ども、新注を廢せず。彼此参考して、必ず至当に帰して止む」と提示している。¹⁰¹ 前にも述べたように、時習館の設立目的は肥後藩の人材を育成すること、特に藩政に有用な役人を確保するためであったが、『時習館学規』から見る限り、玉山がすすめた教育方針は、文献講読中心の教育だった。また、その中身も、あらゆる注釈・解釈を参考にする折衷的な立場を取るものであった。こうした折衷的な秋山玉山の思想的立場について、笠井助治は次のように述べている。「玉山の最初の師水足屏山は、嘗て浅見綱斎に崎門の学を受け、のち、徂徠を宗師と仰ぎ、玉山が最も長く師事した林鳳岡は正統の朱子学派であり、彼の在府中の交友には服部南郭を始め徂徠学徒が多かった。かかる関係から彼の

思想は極めて包容的であった。長く林門に出入りしながら程朱の偏狭に拘泥することもなく、折衷寛容の態度をもって藩主重賢の真意を体し、専ら藩固有の人材育成に努めた。彼の定めた時習館学規に窺われるように、彼の思想が包容的であったと共に、玉山の重んじた所は、主として古学・古註であった。彼が古註に共鳴するに至ったのは、徂徠学徒との交歓に因るものと思われる。¹⁰² 玉山の詩人としての生活も少なからずその文献主義と折衷的な姿勢形成に貢献したのである。

では、こうした教育方針の下になされた時習館の授業は、実際どのようなだったのか。以下は、時習館の授業科目である。

『漢学・習字・習礼』

以上が日々の授業科目であり、さらに後に国学が加えられた。

『算術・音楽・古実』

以上の授業は定日に時習館で行われたが、平日の場合は師範の自宅で行われた。

『馬術・居合・薙刀・劍術・槍術・砲術・射術・軍学・柔術・棒・野太刀・陣貝太鼓』

『大追物』

『游泳』¹⁰³

時習館で使用された教科書については、『熊本県教育史』中に、以下の記述が見出される。

○孝經大學中庸論語孟子及五經等の素讀は、之を句讀齋に於て授け、

○概ね左傳を獨讀し得る程度に及んで之を蒙養齋に移し、

○稍、文義を解するものを選んで、更に之を講堂に轉昇させる。

爾後文選、國語、史記、漢書、綱鑑、通鑑等各其の欲する所に随つて獨修しめ、小學、近思錄、四書、五經及左傳等の會讀は、訓導之を掌り、各書籍を定め講義して生徒に聴かしめ、或は生徒に講義又は討論等を命ずることとした……¹⁰⁴

以上の時習館の教科内容からは、学問研究というよりも、むしろ武士の職分を教育しようとする姿勢が読み取れる。別の言い方をすれば、時習館での教育は読書や武術に偏っており、武士が自己の生活を理論的に理解するための内容は乏しかったともいえよう。そして、『孝経』『大学』『中庸』『論語』『孟子』の素読、『左伝』の独読、さらに『文選』や『近思錄』『四書』など、生徒の好

む書籍に依じて会説を行うといったその教育内容からは、時習館における經典理解を中心とする議論の方向が窺える。後述するように、こうした時習館の教育内容の偏りを批判したのが、横井小楠（一八〇九—一八六九）であった。

時習館では国学も盛んに行われた。時習館の三代目教授、高本柴溟（一七三八—一八一三）は、寛政四年時習館に新たに「国典科」という科目を創設し、国学を導入した。笠井によれば、この授業の内容は記紀律令やその他の皇典国書の講義であり、熊本藩国学の隆興の端を開いたものである。これが後の肥後藩「勤王党」の淵源となったという。柴溟は科目創設に当たって、以下の意見書を提出した。

御当国の儀は、以前は井沢十郎左衛門など名高き国学者これ有り候処、近年一向中絶仕り候に付、当年より国学相誘い、諸生の内必多度会説等仕せ候筈に御座候処、時習館御間差し支え、その儀相成り難く御座候、これにより頃日御達申し候、習書齋建て継ぎ仰せ付られ候は、その内にて少々御間取り分け、国学の所に仕り度く存じ奉り候間、旁以て御達申し候通り間敷、御建て継ぎ仰せ付られ下され候様、猶又願ひ奉り候、以上。

この柴溟の意見書から、肥後に国学者が存在していたことがわかる。この「名高き国学者」とは辛島道珠や井沢蟠龍、帆足長秋などのことである。中でも、特に長秋は、本居系国学を肥後藩に紹介した人物とされ、時習館の記紀・律令や歌・文学の研究はその流れから逸脱することはなかった。時習館に導入された国学は本居系の国学であった。

以上のように時習館の教育体制が、儒学は文献講読主義で、テキストの素読を中心的な学習とした方法であり、国学も同様に、記紀や律令、歌、文学の研究などであったことを考えると、時習館の教育は、テキスト中心の文献主義的教育だったといつてよいであろう。

ところで、文政から天保にかけて肥後において藩政改革が行われた。財政の赤字や食料値段の上昇、そして飢饉を解消するための対策が、この改革の課題であった。肥後藩家老長岡監物、奉行下津休也、居寮生世話役横井小楠、そして天保八年に居寮生となった元田永孚と萩昌国が、この改革の中心的な存在であり、彼らは藩政の土台としてあった時習館から改革を推進した。沼田哲はこの改革について、「主たる目的を居寮制度の改革に置き、藩政に役立つ人材の育成という学校の目的を明確にし、あわせて時習館全体の風潮の刷新をめざす」というもので天保八年二月に実現した。小楠はこの時改革された居寮の初代寮

長に任命された。…（中略）…さて入寮した永孚が小楠のところに行つて学問の方法（為学ノ方）を尋ねたのに対して、小楠は「藩校ノ興ル宝暦ノ盛時ニアリテ其学ハ素ヨリ美ナリト雖トモ学問正大ナラス、秋玉山、徂徠ヲ主トシテ専ラ文辞ノ学、蕪孤山家学ニ由テ程朱ノ学ヲ唱ヘ其実ハ政事ノ才ナリ、高本以下ハ又小ナリ」と時習館創立以来の学風を秋山玉山、蕪孤山、高本柴溟と三代の教授批判の形で行っている」という。

横井小楠らは時習館の学風、そして学校目標と結果との不一致を、中心的な課題とし、時習館の改革を推進しようとしたのである。

小楠が、嘉永五年福井藩の藩政策の顧問であった際、学校と政治について問われたことがある。藩主の「教官の撰、如何なる人にて可然候哉」という問いに対し、小楠は以下のとおり答えている。

（前略）…此に二り之人有之候。一人は知識明に心術正しく候へ共、經学・文詩之芸に達し不申候。一人は篤実謹行に候へ共、知識明ならず、乍然經学・文詩之芸は格別に有之候。大凡の心にては前の人は側用人・奉行等の役人の撰びに入り、後の人を能き教授先生と申候。是即体ありて用無きを儒者と心得候後世人心のくるひにて、其勢記誦詞章の学校に成らざること不能候…（後略）。

ここにいう「其勢記誦詞章の学校に成らざること不能候」は、まさに時習館での教育をさして言おうとしたものであったであろう。

こうした横井小楠の時習館の教育姿勢への批判は、私たちが彼の思想において最も中核的な部分に導く。それは学問と実践との一致であり、いわゆる彼の「実学」の性格である。それは当時の時習館で行われた教育のあり方、文章研究や「記誦詞章」中心の教育に対する批判として表れた。慶応元年（一八六五）に行われた元田永孚との対談、『沼山閑話』中には次のように述べられる。

宋の大儒、天人一体の理を發明し其説論を持す。然れども専ら性・命・道理の上を説て、天人現在の形体上に就て思惟を欠に似たり。其天と云ふも多可理を云、天を敬すると云も此心を持するを云ふ。格物は物に在るの理を知るを云、総て理の上・心の上のみ専らに其天を畏る、事、現在天帝の上に在せる如く、目に視、耳に聞く動搖・周旋、総て天帝の命を受ける如く自然に敬畏なり。…（中略）…大儒を批議するには非ず、後学のもの徒に理学の說話にのみ奔りて、現在天人一体の合点なければ、大源頭に狂ひありて事実の上に於て道を得ざる事多し。能々合点致す可き事なり。

ここから見ると、小楠が「総て理の上・心の上のみ」と一括に批判したのは、文章研究に終始し、人間の實際の問題に即しない学問であった。そして、彼はこの批判を「宋の大儒」朱子本人ではなく、むしろ朱子以降の朱子学派²⁰「後学」に向けて発した。小楠にとってこうした文章研究に終始する学問姿勢は後世の学者が創造したものであり、その責任は彼らにあると主張したのである。小楠にとっての学問のあるべき姿はそれとは別に確かにあり、その立場は、時習館で活躍していたときから晩年にいたるまで一貫したものであったのである。

一―三 時習館と横井小楠の思想的原点

源了圓は横井小楠の思想へのアプローチとして、次のように述べている。「小楠の思想を、その歴史主義的思考が鮮やかに展開されている時務論と、その時務論の思想的基盤をなすかれの美学とに分ける……（後略）」。ここにいう、小楠の「歴史主義的思考」時務論²¹が彼の「美学」思想を基盤にしたとする源の指摘は重要な点である。実際、先に引用した『沼山閑話』中で、小楠は「天人」と「現在」を相互に関係づけて用いている。

この源の指摘は、平石直昭の、小楠の初期思想に対する指摘とも共通する。平石は以下のとおり述べている。「……（前略）こうして初期小楠の思想的傾向は、今日までほぼ空白のまま解明されずにきているわけである。けれども初期といっても、かりに天保十年をとるとして彼は既に三十歳であり、一般に人間の思想形成にとって最初の三十年間の有している重要性を考慮すれば、初期小楠研究の必要性は納得されることであろう。そこで私たちが「萬館雜志」や「遊学雜志」を仔細に検討してみると、そこには多くの興味深い論点が存在しており、後期に至るまでそのタイムや表現を変化させながら、基本的な発想の仕方の点で首尾一貫して保持され続けた思考法や精神態度が、すでに当時の彼に発酵しつつあったことが看取される。……（中略）……いかなる人材、良法といえどもその時処の客観条件に適合でないならば、却って弊害を産むのだという把握、その意味で広義のタイムिंगを政治の第一要諦とする着想が存在する」。

源と平石に共通する横井小楠の理解は、彼の「時務論」と後半期の思想との一貫性であり、横井小楠の思想における一定の論理の所在である。それは「歴史主義」・「時務論」で示される、「真理」の不可変的な見方を示す「後世の儒者」への横井小楠の批判である。小楠の思想の中において「真理」は可変的なものとして常に存し、時間や場所において「真理」を見極めることが重要だという点が、彼の思想理解において重要になるのである。平石はこれについて、小楠

の「萬館雜志」における「郷党連」の存在に即して考えている。小楠は当時熊本肥後藩に存在し、対立・対抗し合った「郷党連」の背景に思想的問題を讀取ろうとし、「究理して得た「理」を絶対的真理とし、それによって自己を律せんとし、その結果他者が僅かでも自己と異なれば直ちにそれは絶対的誤謬と断定され、かくて厳酷に他者を責める弊害が生じている、と彼（小楠）は分析した」とするのである。

「小楠は、学問の場にとどまらず、「討論講習」により「公論」を形成し、為政者の恣意を制限する政治制度の確立をも構想した。それは『学校問答書』に示されている。学校は、君臣が身分の違いにかかわらず（「貴賤尊卑の等」を重視する象山とはこの点でも対照的である）、「政治の得失を討論」する場すなわち「出会所」であり、それが三代の学校のあり方である」と、荊部直も小楠思想における「学問・政治の公共」について指摘しているが、この指摘も、小楠の思想の原型、「時務論」に関わることである。それは、政治場面において私見の否定により形成される「公共」であり、それに基づき政治を行うことである。まさに、「究理」して得られた「理」を固定化し絶対化することを拒絶する小楠の思想の原型を示すものである。

横井小楠の思想の柔軟性はこうした「理」への可変的な捉え方の内に在る。しかし、小楠にはもう一つの顔がある。源が指摘したように、それは「儒者としての自覚」の強さである。以上のような「公共論」や「理」の絶対化の否定、政治的タイムिंगの重要性の主張など、当時においては近代的な発想を有しつつ、小楠はあくまでも儒教の「三代」を理想化し、儒学を思想的基盤としたのである。この点で横井小楠は、佐久間象山ら幕末の儒者と変わらないといえる。また、源了圓は次のように指摘している。「……（前略）そして更にこの実学といふのは、明治になって、福澤諭吉、津田真道によって主張された功利主義的観点に立つ実学と違って、政治と道徳とを根本に於て一致すると考へる儒教的意識の上に成立したものである。このことに附加して、幕末の代表的開明思想家はいづれも洋学を直接に学ぶか、或は洋学に異常な関心を示す人々であったが、儒教に対して批判的態度を持した明治の啓蒙思想家たちと違って、彼は自覚的に、儒教意識の上に洋学を接合しようとした（後略）……」。

こうして「自覚的」にあらためて選びとられた儒学が、小楠の思想にどのような影響をおよぼしたのか。それは彼の儒学への理解を示すものであり、小楠の思想における儒学の再構成・再理解に繋がるものである。

源は圓は小楠の思想（実学思想）と儒学との関係について最も特徴的なものとして、「思・学」の小楠の理解を挙げている。「論語に言ふところの「思而不学則殆。学而不思則昏」といふ言葉は、思と学とが均しく重要であることを示しているが、しかも「吾嘗終日不食。終夜不寝、以思。無益。不如学也。」といふ句は、明らかに学の思よりも優位にあることを示している。そしてまた、事実、中国の社会は読書人によって支配されて来たのである。この点、小楠に於ける思と学との関係はどうなっていたのであろうか。今、『沼山対話』によって、このことを明らかにしてみたい。即ちそこに於て「古の学は皆思の一字に在としられ候」とされ、思は心の知学とされる。更に、人心の知学は無限度あり、この知学を推しひろめることによって、天下の事物は何一つ遺すところなく、自分の心に包攝される。従つて思の一字で学問の大端を包むことが出来る。「中庸」に言ふところの博学明弁も要するに思の字の小割れにすぎない。思は従つて、学に優先する。論語の開卷劈頭の「学而時習」も「己に思ひ思ふてえざる時に是を古人に照し其理を求むる」ものであつて、思は何処までも学に先行するものである。「思」を伴はない読書は帳面調べにすぎない。けつきよく、小楠に於ては、書籍は字引に過ぎない、とされる」と、源は指摘する。⁸⁶

この源の指摘は小楠の思想における「思・学」の問題を明快に示すものである。小楠は、「学」より「思」を重視していた。小楠によれば、「学」とは、「書調べ」であり、「思」は各々物の理を究め、その応用活用を取得することである。『沼山対話』中で、「思」と「学」の関係は、以下のように明確に示されている。

博学・明弁共に皆思の字の小割れにて、其実は思の一字にて学問大端を包めり。全体己に思ふの誠なければ、後世の如く、幾千巻の書を読候ても皆帳面しらべになるものに候。先書は字引と知べく候。一通の書を読得たる後は、書を抛て専ら己に思ふべく候。思ふて得ざるに、是を古人に求め書を開きてみるべし。心の誠より物理を求むる処切なれば、必中夜にも起て書を閲するほどになるものに候。右様致し候えば我知覚も日々ひろまり、学問の正審ひたすら増長致すものなり。己に思はざれば学問の益なく、又思ふに、是を古人に照さざれば一己の私智になることもござ候。

右の引用からは次のことが考えられる。まず、小楠は読書にとどまる学習姿勢を批判した。文献校訂作業やテキストスト解釈などの、かつて時習館にも流行した学習方法もこの中に含まれたのである。そして、小楠は読書の後に「思」というものの理を究め、その応用活用を思う学習過程を、従来の学習方法の代品

として進めた。さらに、「又思ふに、是を古人に照さざれば一己の私智になることもござ候」というように、人の「思」の結果を必ず相対化する過程も必要である。すなわち、ものを極めて得た理を絶対化しないこと、相対化することが小楠の思想に一貫していたことがここからも明らかになる。

以上、横井小楠の思想の本質をこれまでの先行研究を踏まえつつ明らかにしてきた。すなわち、小楠なりの「時務論」、理の絶対化への否定、そして自己の相対化という彼の思想の本質である。こうした思想的営みは小楠の学問の初期にすでにあった。彼は藩校時習館に対する批判的視点を呈示しつつ、そこにおいて自己の思想を形成したのである。

二 青年期元田永孚の思想形成

では、少年期のみならず、人生の大半が江戸後期にあった元田永孚の思想は、熊本肥後藩の学問や横井小楠の思想に影響されつつ、どのように形成されたのだろうか。ここではそれを特に少年期における元田の思想形成、初期に時習館に入校した頃とそれ以前の彼の修学活動に着目し、そこで培われたものが後の元田永孚の思想に貢献したことを明らかにしようと思う。この二つの場面に着目するのは、この二つの場面がこれまで十全に先行研究で論じられていないからである。

二一 家庭での学習と実践教育

時習館に入校する以前の元田永孚の修学方法は主に以下の二つの方法で行われた。一つ目は家庭、特に祖父について学んだこと。二つ目は私塾での学習である。まず元田永孚の家庭について見てみよう。元田永孚の父は藩主の小姓役として近侍し、隔年に藩主の参勤に従い江戸に赴いたため、元田永孚の教育はほとんど祖父によるものであった。永孚は自伝『還暦之記』で次のように回想した。

余三四歳乳母ノ懐ニ在リシ時ヲ記憶セシ事アリト雖トモ分明ニ筆シ難シ其能ク記憶セシハ五歳ノ時ヨリトス此時常ニ祖父祖母君大叔叔ノ側ヲ離レス忠臣孝子猛将勇士ノ絵描ヲ看筆ヲ把リテ其描ヲ写シ祖父君大叔叔君其談話ヲ為シテ之ヲ聴カシメ夜ハ祖母君大叔叔君ノ懐ニ入りテ寝ヌ如此スルコト十歳ヲ超ル迄迄変スルコトナシ。

元田は四歳〜五歳までの体験を回想したが、彼の記憶に残るのは、家族が日常生活の中にさりげなく紹介した「忠臣孝子猛将勇士ノ絵描」である。「教学聖

旨」中の元田自身のことばを借りれば、右の回想はまさに「忠孝ノ大義ヲ第一ニ脳髓ニ感覺セシメンコト」の証であろう。元田の幼児教育（小学条目二件）の原型と見ることもできよう。さらに、元田は以下のように祖父について述べている。

常ニ余ニ謂テ曰ク此家ハ皆祖先ノ興シ玉フ家ナリ子孫斯ク祿食ニ足ル者ハ皆祖先御代々ノ恩澤ニシテ之ヲ賜フハ皆是国君ノ大恩ナリ汝之ヲ忘ル、コト無ク忠孝ヲ篤クセヨト且特ニ神明ヲ尊崇シ僧侶仏法ヲ喜ハス曾祖母君君乃母朝夕神ヲ拜スルヲ以テ務トナスヨリ吾家ノ風トナリ壇ヲ設テ之ヲ祭ル然トモ嘗テ淫褻ノ弊ナシ祖父君大叔姑君每朝起レハ先ツ神ヲ礼拜シ次ニ家ノ祖先代々ノ神主ヲ拜シ出ル時ハ必ス告ケ入レハ亦告ケ生ケル人ニ言語スルカ如ク家人ヲシテ観感惻怛自ラ孝誠ノ心ヲ興起セシムルナリ余ガ「マコ家ノ墳墓発星山本妙寺山内及東光院ノ中ニアリ毎月三回必ス墳墓ニ至ル七八歳弟武雄五六歳ノ時ヨリ親ヲ提携シテ行クヲ樂ミトス里程半里ニ過クルヲ以テ稚歩ニ難ンス往来奔走シ或ハ躓キ或ハ倒ル祖父君保護懇口ニ至ル塋域ニ至レハ則先ツ手自ラ帚ヲ執リテ墓道ヲ掃ヒ水ヲ洒キ香花ヲ供シ先祖以下代々ノ墓前ニ順次ニ拜謁ス第一碑ヲ指テ余ニ示シテ曰ク是汝カ家ノ先祖梅林府君ノ墓ナリ島原ノ賊ヲ賊スルハ此君ナリ汝カ家ヲ再興シ子孫血食今ニ至ルハ此君ノ恩ナリ又第三碑ヲ指テ曰ク是三代無常府君ノ墓ナリ汝カ家ヲ興隆シ職大鑿祭ニ升リシハ此君ナリ靈感公ヨリ佩刀ノ賜ヲ受ケシハ此君ナリ汝之ヲ忘ル、コト勿レ又曰ク此レハ某々ナリ彼レハ某々ナリ皆一々指點シテ漏ル、コトナシ余是ニ由テ幼キヨリ其言ノ骨ニ銘シテ痛切ナルヲ覚ヘ……（中略）……如此スルコト凡三十年許其誠惻篤行宛モ一日ノ如キナリ。

ここから分かるように、元田は家族、特に祖父祖母から祖先への恩について教わっていた。こうした日常事が『還暦之記』という自らの回想に長文で記述されたことは、元田にとって、こうした教諭・実践が自らの人格や思想の形成に貢献したと自覚したためであったであろう。それこそが「回想」ということばの意味だからである。

さらに、永孚の祖父がいう「是汝カ家ノ先祖梅林府君ノ墓ナリ島原ノ賊ヲ賊スルハ此君ナリ汝カ家ヲ再興シ子孫血食今ニ至ルハ此君ノ恩ナリ又第三碑ヲ指テ曰ク是三代無常府君ノ墓ナリ汝カ家ヲ興隆シ職大鑿祭ニ升リシハ此君ナリ靈感公ヨリ佩刀ノ賜ヲ受ケシハ此君ナリ汝之ヲ忘ル、コト勿レ」は、祖先への報恩を抽象的概念としてではなく、実体のある行動と実体のある対象として、祖

父が永孚に教えたことを示している。家族からこうした教育を受けた永孚は「余是ニ由テ幼キヨリ其言ノ骨ニ銘シテ痛切ナルヲ覚ヘ」たとしており、まさにこうした家庭教育の効果は永孚の人格に非常に大きな意味を持っていたことが考えられる。

こうした祖先への報恩の教育を授ける一方、祖父が永孚に教えた学問的なこともある。それは次の永孚の言から窺える。「十歳ニ至リテ始メテ唐詩ヲ誦シ又論語ヲ読ム皆祖父君ノ口授面命スル所ナリ」。祖父の詳細な学習内容の中心について永孚は特に触れていないが、ここで注目したいことは、こうしたテキストを用いた学習をしながら、同時に永孚を墳墓に連れていき、祖先への恩について実践的な行動とあわせて永孚に教えたことである。永孚の祖父が実践した「祖先への恩」と永孚への「論語」の教授、この二つの学習は相矛盾せずに行われ、工夫されていたと考えることができる。

二―二 私塾と時習館での学習

二―一で述べたように、元田は家族から教育を受けると同時に、熊本肥後藩にある私塾に通い始めた。その経緯は「其歳ノ十月始テ村井先生ニ就テ孟子ヲ読ミ町先生ニ就テ習字ヲ学ブ十一歳ノ八月ニ至テ時習館句読齋ニ通学シ十二歳ノ正月ヨリ習書齋ニ出頭ス十三歳ノ時井上先生ニ就テ詩ヲ作ルコトヲ学ヒ十四歳ノ十月官ノ賞典ヲ受ケ読書習字作詩共ニ精勤進歩スルヲ以テ金二百匹ヲ賜ヘリ」と記されている。

この永孚の句読師への勉強を薦めたのも実は祖父であった。「祖父君常ニ余ニ謂テ曰ク人学問セザレバ道理ニ暗シ文筆劣ケレハ心志ヲ達セス我学問ナク文筆拙シ之ヲ悔ユトモ及ハス汝宜シク之ヲ務メヨ」。もちろん、祖父による教育も、この私塾の通学と並行していた。その証拠は以下の元田の言である。この永孚の言は、永孚が通った井上九成という詩の先生についてであるが、「井上九成先生ヲ師トシ学フ初メ境整丈之助君ハ祖母ノ妹ノ婿ナリ故ニ朝夕相来往シテ親ミ善シ丈之助君博識ノ君子ナルヲ以テ祖父君常ニ之ヲ推尊シ余ヲシテ之ニ親炙セシメ時々招待シテ其談話ヲ叩キ古今聖賢豪傑忠臣孝子文詩歌ノ雅談ヲ尽シテ余ニ傍聴セシメテ見聞ヲ博メシム」。すなわち、永孚の祖父は、自分以外の師を介しても「古今聖賢豪傑忠臣孝子」を永孚に教え込もうとしたのである。ここにも永孚の祖父の教育熱心が確認でき、その教育内容が明らかになる。それは、「古今聖賢豪傑忠臣孝子」や「祖先への恩」に関わることからである。

永孚は元来、文章に興味を持ち、祖父もそれを奨励した。そのためこのころ

の永孚の教育のほとんどは文書と詩の作成など、經典の読書が中心である。永孚も度々祖父と一緒に書籍を購入し、読書した。しかし、こうした文書中心の学習への傾向の強い永孚に、彼の書物への関心を一変させた出来事がある。それは横井小楠との出会いであった。

余命ヲ受ルノ始横井先生ニ至リ拜命ノ旨ヲ告ケテ為学ノ方ヲ問ヒタルニ先生曰ク藩校ノ興ル宝曆ノ盛時ニアリテ其拳ハ素ヨリ美ナリト雖トモ学問正ナナラヌ秋山玉山徂徠ヲ主トシテ専ラ文辭ノ学數孤山家学ニ由テ程朱ノ学ヲ唱ヘ其実ハ政事ノ才ナリ高本以下ハ又小ナリ安野ノ学史オラ貴トシテ僅ニ宋名臣言行録一部ヲ熟読スルノミ凡ソ学問ハ古今治乱興廢ヲ洞見シテ己レノ知識ヲ達スルニアリ須ラク博ク和漢ノ歴史ニ涉リ近小ニ局スヘカラス廿二史ノ書等一読スヘシ然ラサレハ経國ノ用ニ乏シク共ニ為ルニ足ラス……(後略)。

横井小楠との出会いによって、元田の書物中心の学習に大きな衝撃を与えられた。それは書物によつてのみ為学することへの小楠の批判である。以降、元田は小楠に師事し、学問的にも大きな影響を受けることとなった。元田が受けた小楠の思想は、その学問への視野である。たとえば、小楠が江戸に遊学したとき、柏木が小楠の代りに寮長になったときのことである。彼は寮生の学習を指導したが、柏木の「学ハ経書章句ヲ主トシ理論考索ヲ専ニシ」たものである、と元田は心の中で批判した。それだけではなく、元田は登校しなかったこともあった。

元田が受けた小楠の思想、「古今治乱興廢ヲ洞見」は、小楠の中において大きな意味を持っていた。小楠にとつてそれは、真理の絶対化への否定に繋がるものであったからである。

以上をまとめると以下のことが言えるだろう。元田永孚は、その青年期に二つの教育を身をもって体験した。まず第一に、家族、特に祖父からの実践的な教育である。そこにおいて、元田は忠孝や祖先への恩という概念を抽象的なものとして学ぶのではなく、祖先の墳墓へお参りする、という行動で概念を具体化する祖父の訓導を授けられた。

もう一つは、横井小楠と出会いによって形成された小楠の学問方法に基づく教育である。それは、これまで書物好きの元田永孚にその書物そのものへの捉え方を変化させた「事件」である。この二つの教育とその内容が、「実践」と「抽象概念の実体化」といった相関した思想体験となつて、彼の内に結実していたのだといえよう。

元田永孚の思想形成と小楠の思想の継承——終わりにかえて——

元田永孚は小楠から「為学」について啓発をされてから、自らの状況について次のように述べている。

是ヨリ専ラ先生ニ就テ講学シ自ラ謂ラク経書ハ人道ノ軌範忠孝仁義ハ吾心ノ素定スル所其事实ニ運用シ家國ニ達スルハ識眼ヲ歴史ニ注クニアリ詩ハ性情ヲ言フ既ニ好ム所文ヲ学シテ以テ吾輩スル所ヲ発揚スヘシ之ヲ以テ居寮三年ノ学ト決シ必ス成ス所有ント因テ専ラ歴史ヲ読ミ文章ヲ学フ歴史ハ先生ト会談シ一文ヲ作レハ必ス先生ノ批閱ヲ受ク。

右の引用を見ると、横井小楠と面会してから、元田の学問への志が固まったことがわかる。それは横井小楠の学問方法——歴史の移り変わりを重視すること、「古今治乱興廢ヲ洞見」——を継承することである。そして、右の引用にも、「忠孝仁義」という明治期における元田の思想のキーワードが現れている。彼は、「忠孝仁義」とは「吾心ノ素定スル所」だと考えた。さらに、經典に対する捉え方も、この引用から窺える。それは「経書ハ人道ノ軌範」だということである。そして、これら、特に「忠孝仁義」を「運用シ家國ニ達スル」ことを目指した。最後に、元田はこれらの理論の基礎として、小楠から学んだ「歴史ニ注ク」理論を置いた。

元田の、国家の運用のために「忠孝仁義」を尽くさなければならぬ、とする思考の原点として、以下の二つが考えられる。まず、祖父からいつも「家ハ皆祖先ノ興シ玉フ家ナリ子孫斯ク祿食ニ足ル者ハ皆祖先御代々ノ恩澤ニシテ之ヲ賜フハ皆是國君ノ大恩ナリ汝之ヲ忘ル、コト無ク忠孝ヲ篤クセヨ」とする教訓である。そして二つめは、小楠の「為学」理論を通じて、本来の時習館の目的と現状およびその目標を再確認した小楠の批判思想、この一連の出来事を受けたことである。

こうした祖父の教育と小楠の思想によって強化された元田の思想は、明治期に至つて更に明らかになってくる。その例として、ここでは明治一五年に著された元田の『学制につき勸諭拝承覚』を取上げたい。特にその拝承覚の中の小學生に教えるべき科目について注目したい。

……(前略) 今從來の米英に偏せしものを洗除し、小学修身科道徳を主として専ら尊王愛國の精神を養成せんが爲めに歴史科に於ては、我國史の外漢洋共に用ひざるが如き最其宜きを得たりとす。……(後略)。

明治初期元田の議論にも、歴史への重視と「忠孝仁義」——右の引用には「尊王愛国」に変容——が読取れる。

以上のように、元田永孚の思想形成に幼い頃の祖父教育と横井小楠の思想が大きく貢献したことがわかる。特に彼の青年期の体験を論理的な枠組みを付けたのは横井小楠の思想である。では、こうした思想的基盤を形成した元田が明治期に入ってからどのような新たな思想的展開をとげたのか。それが次の検討課題となる。

【注】

- (1) 筆者の知る限り、近世後期における元田永孚の思想形成について議論した研究は、沼田哲『元田永孚と明治国家』、吉川弘文館、二〇〇五年のみであるが、沼田哲も、元田と横井小楠との出会い、そして熊本実学堂の結成など、近世後期における元田の思想形成について論じながら、その前半期には多少しか触れていない。
- (2) 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』通史編第四卷「近世Ⅱ」、熊本市、一九九四年、七八八頁。
- (3) 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史』通史編第四卷「近世Ⅱ」、熊本市、一九九四年、八〇〇頁。
- (4) 同右、八六〇頁。
- (5) 以下は、『新熊本市史』通史第四卷「近世Ⅱ」、前掲、八六三頁—八六四頁および笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下巻、吉川弘文館、一九七〇年、一七二—二頁—一七六頁から作成した熊本肥後藩の主な私塾とその設立者または校主・校長の名簿である。①敷塾—敷孤山（時習館三代目教授）、②富田塾—富田大淵（再春館教授、多十郎（時習館助教）、③辛島塾—辛島才蔵（時習館四代目教授）、④大城塾—大城多十郎（時習館助教）、⑤古閑塾—宮田壺隠（時習館助教）、⑥大城塾—大城多十郎（時習館助教）、⑦辛島塾—辛島才蔵（時習館四代目教授）、⑧近藤塾—近藤英助（時習館五代目教授）、⑨月田塾—月田鉄太郎（時習館助教）、⑩小楠塾—横井小楠（時習館居寮長）、⑪林塾—林藤次（時習館講師・国学科）、⑫核田塾—核田惣次郎、⑬牛田塾—牛田伍一郎、⑭平田塾—平田子之八、⑮新原塾—新原助之進（時習館助教）、⑯尾池塾—西山大衛、⑰木下塾—木下村（時習館助教）。
- (6) 同右、通史第四卷「近世Ⅱ」、七八七頁。
- (7) 『時習館学規』は同右、史料編第三卷「近世Ⅰ」、九二—一九二〇頁、所収。原文は漢文、書下しは『新熊本市史』によるものを使用。以下同。
- (8) 同右、七八九頁。熊本県教育会編『熊本県教育史』、臨川書店、一九七五年、上巻、三六一—三八頁も参照。
- (9) 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』、吉川弘文館、一九七〇年、下巻、一七一—一七二頁。
- (10) 『新熊本市史』史料編第三卷「近世Ⅰ」、前掲、九一—九五頁。
- (11) 同右、九一—九五頁。
- (12) 『近世藩校に於ける学統学派の研究』、前掲、一七三—一七四頁。

- (13) 『熊本県教育史』、前掲、四五—四六頁を参照にし、さらに『新熊本市史』史料編第三卷「近世Ⅰ」に所収の『時習館学規』や笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』、前掲、一七一—一七六頁を参照し作成した。
- (14) 『熊本県教育史』、前掲、四六頁。
- (15) 『近世藩校に於ける学統学派の研究』、前掲、一七三—一七五頁。
- (16) 『新熊本市史』通史編第四卷「近世Ⅱ」、前掲、八四—八六頁。
- (17) 同右。
- (18) 沼田哲『元田永孚と明治国家』、吉川弘文館、二〇〇五年、三〇頁。
- (19) 横井小楠『学校問答書』（『日本思想体系』第五五巻「渡辺華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内」、岩波書店、一九七七年、四三—四四頁）。
- (20) 『沼山閑語』（『日本思想体系』、前掲、五一—五二頁）。
- (21) 源了圓『横井小楠の実学—幕末思想史の一断面—』（『哲学研究』、京都哲学会、第三七巻第四三三—四三六頁、一九五六年、四三三頁）。
- (22) 平石直昭『横井小楠研究ノート—思想形成に関する事実分析を中心に—』（『社会科学研究』、東京大学社会科学研究所、第二四巻第五六号、一九七三年、二〇—二二頁）。
- (23) 同右、二〇—二二頁。また、平石は小楠研究に対するこのようなアプローチは「視点の相対化」とし、それは「すなわち、自己が「究理」してえた「理」を排他的に絶対視するために、そうした主体自身としては「不得不潔其行」であると共に、他方では他者に対して自己とひとしく「其行」を「潔」にするように強制せざるをえず、ここに他者に対する「酷以真人」めるリゴリスチックな対他態度が現出する。しかも実際にはその「理」は、「一方が「究理」してえた主観的な「理」にすぎず、したがって他方も「究理」して自己の「合理」性をやはり主観的に主張しうるから、かくして相対立する「朋党」双方が、ともに自己の排他的な「合理」性を確認しうることになる」とする（平石直昭「主体・天理・天帝（一）—横井小楠の政治思想—」（『社会科学研究所』、東京大学社会科学研究所、第二五巻第五号、一九七四年、四二—四三頁）。
- (24) 苅部直『利欲世界』と「公共之政」—横井小楠・元田永孚—（『国家学会雑誌』、第一〇四巻第一—二号、一三三頁）。
- (25) 源了圓『小楠の実学』、前掲、四三—四四頁。
- (26) 同右、四六頁。
- (27) 『沼山対話』（『日本思想体系』、前掲、四九—五〇頁）。
- (28) 『還暦之記』（海後宗臣、元田竹彦編『元田永孚文書』第一巻「自傳・日記」、元田文書研究会、四頁）。
- (29) 『教学聖旨』と「小学条目二件」は、加藤周一ほか編『日本近代思想体系』第六巻「教育の体系」、七八頁—七九頁に所収のものを使用した。
- (30) 『還暦之記』、前掲、六頁。
- (31) 同右、四頁。
- (32) 同右、九頁。
- (33) 同右。
- (34) 同右、一〇頁。
- (35) 同右、一一頁。
- (36) 同右、一二頁。
- (37) 同右、二二頁。
- (38) 海後宗臣『元田永孚』、文教書院、一九四二年、原典編、一一—一二頁。

Formation of Motoda Nagazane's Thought:
Related to Education in Late Edo Period of Higo

Andy Bangkit Setiawan

Abstract: This study aims to reconstruct formation of Emperor Meiji's educator, Motoda Nagazane especially in his youth related to education style and system in late Edo period in Higo Kumamoto Prefecture. Main topic in this study is to know how Motoda Nagazane's thought built in his youth which will be the basic of his thought in his activity in Meiji period. It is shown by this study that Motoda Nagazane thought formed at least by two factors: His grandfather daily education and school reformation in Jishukan held by Yokoi Shonan. These two factors gave contribution in Motoda Nagazane thought formation. Nagazane learnt from his grandfather, that a person should respect his ancestor and those ancestor were gave their loyalty to their sovereign. This character fixed in Nagazane. From Yokoi Shonan, he learnt that "think" is the base of knowledge, and learning is to "think". By this concept, Nagazane learnt that truth is transformable.

Key words: Motoda Nagazane, Yokoi Shonan, Jishukan, thought formation

キーワード：元田永孚、横井小楠、時習館、思想形成